

風の又三郎

宮沢賢治

青空文庫

どつどど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ

すつぱいかりんも吹きとばせ

どつどど どどうど どどうど どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は三年生がいないだけで、あとは一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのくらいでしたが、すぐうしろは栗くりの木のあるきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼつめたい水を噴ふく岩穴いわくもあったのです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪ゆきぼかま袴はかまをはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいつて来て、ただほかにだれも来ていないのを見て、「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかわるがわる叫びながら大よろこびで門をはいつて来たのでしたが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびつくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶるふるえましふたり

たが、ひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり、いちばん前の机にちゃんとすわっていたのです。そしてその机といたらまったくこの泣いた子の自分の机だったのです。

もひとりの子ももう半分泣きかけていましたが、それでもむりやり目をりと張って、そっちのほうをにらめていましたら、ちょうどそのとき、川上から、

「ちようはあ かぐり ちようはあ かぐり。」と高く叫ぶ声が出て、それからまるで大きなからすのように、嘉助かすけがかばんをかかえてわらって運動場へかけて来ました。と思つたらすぐそのあとから佐太郎さたろうだの耕助こうすけだのどやどややってきました。

「なして泣いでら、うなかもたのが。」嘉助が泣かないこどもの肩をつかまえて言いました。するとその子もわあと泣いてしまいました。おかしとおもってみんながあたりを見ると、教室の中にあの赤毛のおかしな子がすまして、しゃんとすわっているのが目につきました。

みんなはしんとなくなってしまいました。だんだんみんな女の子たちも集まって来ましたが、だれもなんとも言えませんでした。

赤毛の子どもはいつこうこわがるふうもなくやっぱりちゃんとすわって、じつと黒板を見ています。すると六年生の一郎いちろうが来ました。一郎はまるでおとなのようにゆっくり大またにやってきて、みんなを見て、

「何なにした。」とききました。

みんなはじめてがやがや声をたててその教室の中の変な子を指さしました。一郎はしばらくそつちを見ていましたが、やがて鞆かばんをしつかりかかえて、さつきと窓の下へ行きました。

みんなもすっかり元気になってついて行きました。

「だれだ、時間にならないに教室へはいつてるのは。」一郎は窓へはいのぼって教室の中へ顔をつき出して言いました。

「お天気の良い時教室さはいつてるけど先生にうんとしからえるぞ。」窓の下の耕助が言いました。

「しからえでもおら知らないよ。」嘉助が言いました。

「早く出はって来こ、出はって来。」一郎が言いました。けれどもそのこどもはきよろきよろ室へやの中やみんなのほうを見るばかりで、やっぱりちゃんとひぎに手をおいて腰掛けにす

わつていました。

ぜんたいその形からが実におかしいのでした。変てこなねずみいろのだぶだぶの上着を着て、白い半ずぼんをはいて、それに赤い革かわの半靴はんぐつをはいていたのです。

それに顔といったらまるで熟したりんごのよう、ことに目はまん丸でまっくらなのでした。いっこう言葉が通じないようなので一郎も全く困ってしまいました。

「あいづは外国人だな。」

「学校さはいるのだな。」みんなはがやがやがや言いました。ところが五年生の嘉助がいきなり、

「ああ三年生さはいるのだ。」と叫びましたので、

「ああそうだ。」と小さいこどもらは思いましたが、一郎はだまってくびをまげました。変なこどもはやはりきよろきよろこつちを見るだけ、きちんと腰掛けています。

そのとき風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、学校のうしろの山の萱かやや栗くりの木はみんな変に青じろくなつてゆれ、教室のなかのこどもはなんだかにやつとわらつてすこしうごいたようでした。

すると嘉助がすぐ叫びました。

「ああわかった。あいつは風の又三郎またさぶろうだぞ。」

そうだとみんなもおもったとき、にわかにうしろのほうで五郎が、

「わあ、痛いぢやあ。」と叫びました。

みんなそつちへ振り向きますと、五郎が耕助に足のゆびをふまれて、まるでおこつて耕助をなぐりつけていたのです。すると耕助もおこつて、

「わあ、われ悪くてでひと撲はだいだなあ。」と言つてまた五郎をなぐろうとしました。

五郎はまるで顔じゆう涙だらけにして耕助に組み付こうとしました。そこで一郎が間へはいつて嘉助が耕助を押えてしまいました。

「わあい、けんかするなつたら、先生あちやんと職員室に来てらぞ。」と一郎が言いながらまた教室のほうを見ましたら、一郎はにわかにまるでぼかんとしてしまいました。

たつたいままで教室にいたあの変な子が影もかたちもないのです。みんなもまるでせつかく友だちになつた子うまが遠くへやられたよう、せつかく捕とつた山雀やまがらに逃げられたように思いました。

風がまたどうと吹いて来て窓ガラスをがたがた言わせ、うしろの山の萱かやをだんだん上流のほうへ青じろく波だてて行きました。

「わあ、うなだけんかしたんだがら又三郎いなくなつたな。」嘉助がおこつて言いました。みんなもほんとうにそう思いました。五郎はじつに申しわけないと思つて、足の痛いのも忘れてしょんぼり肩をすぼめて立つたのです。

「やつぱりあいつは風の又三郎だつたな。」

「二百十日で来たのだな。」

「靴くつはいでだたぞ。」

「服も着でだたぞ。」

「髪赤くておかしやづだつたな。」

「ありやありや、又三郎おれの机の上さ石かけ乗せでつたぞ。」二年生の子が言いました。見るとその子の机の上にはきたない石かけが乗つていたのです。

「そうだ、ありや。あそこのガラスもぶつかしたぞ。」

「そでないであ。あいづあ休み前に嘉助石ぶつつけだのだな。」

「わあい。そでないであ。」と言つていたとき、これはまたなんというわけでしょう。先生が玄関から出て来たのです。先生はぴかぴか光る呼び子を右手にもつて、もう集まれのしたくをしているのでしたが、そのすぐうしろから、さっきの赤い髪の子が、まるでごんげ権

現さまの尾っぱ持ちのようにすまし込んで、白いシャツポをかぶって、先生についてすばとあるいて来たのです。

みんなはしいんとなつてしまいました。やつと一郎が「先生お早うございます。」と言いましたのでみんなもついて、

「先生お早うございます。」と言つただけでした。

「みなさん。お早う。どなたも元気ですね。では並んで。」先生は呼び子をビルルと吹きました。それはすぐ谷の向こうの山へひびいてまたビルルと低く戻もとってきました。

すつかりやすみの前のおりだとみんなが思いながら六年生は一人、五年生は七人、四年生は六人、一二年生は十二人、組ごとに一列に縦にならびました。

二年は八人、一年生は四人前へならえをしてならんだのです。

するとその間あのおかしな子は、何かおかしいのかおもしろいのか奥歯で横うちよに舌をかむようにして、じろじろみんなを見ながら先生のうしろに立っていたのです。すると先生は、高田たかださんこつちへおはいりなさいと言いながら五年生の列のところへ連れて行って、丈たけを嘉助とくらべてから嘉助とそのうしろのきよの間へ立たせました。

みんなはふりかえつてじつとそれを見ていました。

先生はまた玄関の前に戻って、

「前へならえ。」と号令をかけました。

みんなはもう一ぺん前へならえをしてすっかり列をつくりましたが、じつはあの変な子がどういふふうになっているのか見たくて、かわるがわるそつちをふりむいたり横目でにらんだりしたのでした。するとその子はちゃんと前へならえでもなんでも知ってるらしく平気で両腕を前へ出して、指さきを嘉助のせなかへやつと届くくらいにしていたものですから、嘉助はなんだかせなかがかゆく、くすぐりたいといふふうにもじもじしていました。

「直れ。」先生がまた号令をかけました。

「一年から順に前へおい。」そこで一年生はあるき出し、まもなく二年生もあるき出してみんなの前をぐるつと通つて、右手の下駄箱げたばこのある入り口にはいつて行きました。四年生があるき出すときさっきの子も嘉助のあとへついて大威張りであるいて行きました。前へ行った子もときどきふりかえつて見、あとの者もじつと見ていたのです。

まもなくみんなはきものを下駄箱げたばこに入れて教室へはいつて、ちようど外へならんだときのように組ごとに一列に机にすわりました。さっきの子もすまし込んで嘉助のうしろにすわりました。ところがもう大きすぎです。

「わあ、おらの机さ石かけはいつてるぞ。」

「わあ、おらの机代わってるぞ。」

「キッコ、キッコ、うな通信簿持って来たが。おら忘れて来たぢやあ。」

「わあい、さの、木ペン借せ、木ペン借せたら。」

「わあがない。ひとの雑記帳とつてつて。」

そのとき先生がはいつて来ましたのでみんなもさわぎながらとにかく立ちあがり、一郎がいちばんうしろで、

「礼。」と言いました。

みんなはおじぎをする間はちよつとしんとなりましたが、それからまたがやがやがやがや言いました。

「しずかに、みなさん。しずかにするのです。」先生が言いました。

「しつ、悦治えつじ、やがまじつたら、嘉助きすけえ、喜きつこう。わあい。」と一郎がいちばんうしろからあまりさわぐものを一人ずつしかりました。

みんなはしんとなりました。

先生が言いました。

「みなさん、長い夏のお休みはおもしろかったですね。みなさんは朝から水泳ぎもできたし、林の中で鷹たかにも負けないくらい高く叫んだり、またにいさんの草刈りについて上うえの野原へ行ったりしたでしょう。けれどももうきのうで休みは終わりました。これからは第二学期で秋です。むかしから秋はいちばんからだもころもひきしまつて、勉強のできる時だといってあるのです。ですから、みなさんもきょうからまたいっしょにしっかり勉強しましょう。それからこのお休みの間にみなさんのお友だちが一人ふえました。それはここにいる高田さんです。そのかたのおとうさんはこんど会社のご用で上の野原の入り口へおいでになっていられるのです。高田さんはいままでは北海道の学校におられたのですが、きょうからみなさんのお友だちになるのですから、みなさんは学校で勉強のときも、また栗くり拾ひろいや魚さかなとりに行くときも、高田さんをさそうようにしなければなりません。わかりましたか。わかった人は手をあげてごらん下さい。」

すぐみんなは手をあげました。その高田とよばれた子も勢いよく手をあげましたので、ちよつと先生はわらいましたが、すぐ、

「わかりましたね、ではよし。」と言いましたので、みんなは火の消えたように一ぺんに手をおろしました。

ところが嘉助がすぐ、

「先生。」といってまた手をあげました。

「はい。」先生は嘉助を指さしました。

「高田さん名はなんて言うべな。」

「高田三郎さぶろうさんです。」

「わあ、うまい、そりや、やつぱり又三郎だな。」嘉助はまるで手をたたいて机の中で踊るようにしましたので、大きなほうの子どもらはどっと笑いましたが、下の子どもらは何かこわいというふうにしいんとして三郎のほうを見ていたのです。

先生はまた言いました。

「きようはみなさんは通信簿と宿題をもってくるのでしたね。持って来た人は机の上へ出してください。私がいま集めに行きますから。」

みんなはばたばたかばん鞆をあけたりふろしきをといたりして、通信簿と宿題を机の上に出しました。そして先生が一年生のほうから順にそれを集めはじめました。そのときみんなはぎよつとしました。というわけはみんなのうしろのところについてか一人の大人おとなが立っていたのです。その人は白いだぶだぶの麻服を着て黒いてかてかしたはんけちをネクタイの代

わりに首に巻いて、手には白い扇をもって軽くじぶんの顔を扇あおぎながら少し笑ってみんなを見おろしていたのです。さあみんなはだんだんしいんとなつて、まるで堅くなつてしまいました。

ところが先生は別にその人を気にかけるふうもなく、順々に通信簿を集めて三郎の席まで行きますと、三郎は通信簿も宿題帳もないかわりに両手をにぎりこぶしにして二つ机の上のせていたのです。先生はだまつてそこを通りすぎ、みんなのを集めてしまふとそれを両手でそろえながらまた教壇に戻りました。

「では宿題帳はこの次の土曜日に直して渡しますから、きよう持つて来なかつた人は、あしたきつと忘れないで持つて来てください。それは悦治さんと勇治ゆうじさんと良りょう作さくさんとですね。ではきようはここまでです。あしたからちゃんといつものとおりのしたくをしておいでなさい。それから四年生と六年生の人は、先生といっしょに教室のお掃除そうじをしましょう。ではここまで。」

一郎が気をつけ、と言いみんなは一ぺんに立ちました。うしろの大人おとなも扇を下にさげて立ちました。

「礼。」先生もみんなも礼をしました。うしろの大人も軽く頭を下げました。それからず

うつと下の組の子どもらは一目散に教室を飛び出しましたが、四年生の子どもらはまだもじもじしていました。

すると三郎はさつきのだぶだぶの白い服の人のところへ行きました。先生も教壇をおりてその人のところへ行きました。

「いやどうもご苦労さまでございます。」その大人はていねいに先生に礼をしました。

「じきみんなとお友だちになりますから。」先生も礼を返しながら言いました。

「何ぶんどうかよろしくおねがいたします。それでは。」その人はまたていねいに礼をして目で三郎に合図すると、自分は玄関のほうへまわって外へ出て待っていますと、三郎はみんなの見える中を目をりんとはってだまって昇降口から出て行って追いつき、二人は運動場を通って川下のほうへ歩いて行きました。

運動場を出るときその子はこつちをふりむいて、じつと学校やみんなのほうをにらむようにすると、またすたすた白服の大人おとなについて歩いて行きました。

「先生、あの人は高田さんのとうさんですか。」一郎が箒ほうきをもちながら先生にききました。

「そうです。」

「なんの用で来たべ。」

「上の野原の入り口にモリブデンという鉱石ができるので、それをだんだん掘るようになるためだそうです。」

「どこらあたりだべな。」

「私もまだよくわかりませんが、いつもみなさんが馬をつれて行くみちから、少し川下へ寄ったほうなようです。」

「モリブデン何にするべな。」

「それは鉄とまぜたり、薬をつくつたりするのだそうです。」

「そだら又三郎も掘るべが。」嘉助が言いました。

「又三郎だない。高田三郎だぢや。」佐太郎が言いました。

「又三郎だ又三郎だ。」嘉助が顔をまっ赤かにしてがん張りしました。

「嘉助、うなも残つてらば掃除そうじしてすけろ。」一郎が言いました。

「わあい。やんたちぢや。きよう四年生ど六年生だな。」

嘉助は大急ぎで教室をはねだして逃げてしまいました。

風がまた吹いて来て窓ガラスはまたがたがた鳴り、ぞうきんを入れたバケツにも小さな黒い波をたてました。

次の日一郎はあのおかしな子供が、きょうからほんとうに学校へ来て本を読んだりするかどうか早く見たいような気がして、いつもより早く嘉助をさそいました。ところが嘉助のほうは一郎よりもつとそう考えていたと見えて、とうにごはんもたべ、ふろしきに包んだ本ももつて家の前へ出て一郎を待っていたのでした。二人は途中もいろいろその子のことを話しながら学校へ来ました。すると運動場には小さな子供らがもう七八人集まっています、棒かくしをしていましたが、その子はまだ来ていませんでした。またきのうのように教室の中にいるのかと思つて中をのぞいて見ましたが、教室の中はしいんとしてだれもいず、黒板の上にはきのう掃除のときぞうきんでふいた跡がかわいてぼんやり白い縞しまになつていました。

「きのうのやつまだ来てないな。」一郎が言いました。

「うん。」嘉助も言つてそこらを見まわしました。

一郎はそこで鉄棒の下へ行つて、じやみ上がりというやり方で、無理やりに鉄棒の上のぼり両腕をだんだん寄せて右の腕木に行くと、そこへ腰掛けてきのう三郎の行ったほうをじつと見おろして待つていました。谷川はそつちのほうへきらきら光つてながれて行き、

その下の山の上のほうでは風も吹いているらしく、ときどき萱^{かや}が白く波立っていました。

嘉助もやっぱりその柱の下でじつとそつちを見て待っていました。ところが二人はそんなに長く待つこともありませんでした。それは突然三郎がその下手のみちから灰いろの鞆^{かばん}を右手にかかえて走るようにして出て来たのです。

「来たぞ。」と一郎が思わず下にいる嘉助へ叫ぼうとしていきますと、早くも三郎はどてをぐるつとまわって、どンドン正門をはいつて来ると、

「お早う。」とはつきり言いました。みんなはいっしょにそつちをふり向きましたが、一人も返事をしたものがありませんでした。

それは返事をしないのではなくて、みんなは先生にはいつでも「お早うございます。」というように習っていたのですが、お互いに「お早う。」なんて言ったことがなかったのに三郎にそう言われても、一郎や嘉助はあんまりにわかで、また勢いがいいのでとうとう臆^{おく}してしまつて一郎も嘉助も口の中でお早うというかわりに、もにやもにやつと言つてしまつたのでした。

ところが三郎のほうはべつだんそれを苦にするふうもなく、二三歩また前へ進むとじつと立って、そのまっ黒な目でぐるつと運動場じゆうを見まわしました。そしてしばらくだ

れか遊ぶ相手がないかさがしているようでした。けれどもみんなきよろきよろ三郎のほうはみていても、やはり忙しそうに棒かくしをしたり三郎のほうへ行くものがありませんでした。三郎はちよつと具合が悪いようにそこにつつ立っていました。また運動場をもう一度見まわしました。

それからぜんたいこの運動場は何間なんげんあるかというように、正門から玄関まで大またに歩数を数えながら歩きはじめました。一郎は急いで鉄棒をはねおりて嘉助とならんで、息をこらしてそれを見ていました。

そのうち三郎は向こうの玄関の前まで行つてしまうと、こつちへ向いてしばらく暗算をするように少し首をまげて立っていました。

みんなはやはりきろきろそつちを見えています。三郎は少し困つたように両手をうしろへ組むと向こう側の土手のほうへ職員室の前を通つて歩きだしました。

その時風がざあつと吹いて来て土手の草はざわざわ波になり、運動場のまん中でさあつと塵ちりがあがり、それが玄関の前まで行くと、きりきりとまわつて小さなつむじ風になって、黄いろな塵は瓶びんをさかさまにしたような形になつて屋根より高くのぼりました。

すると嘉助が突然高く言いました。

「そうだ。やつぱりあいづ又三郎だぞ。あいづ何かするときつと風吹いてくるぞ。」

「うん。」一郎はどうだかわからないと思いつながらもだまってそつちを見ていました。三郎はそんなことにはかまわず土手のほうへやはりすたすた歩いて行きます。

そのとき先生がいつものように呼び子をもって玄関を出て来たのです。

「お早うございます。」小さな子どもらはみんな集まりました。

「お早う。」先生はちらつと運動場を見まわしてから、「ではならんで。」と言いつながらビルルツと笛を吹きました。

みんなは集まってきてきのうのとおりきちんとならびました。三郎もきのう言われた所へちゃんと立っています。

先生はお日さまがまつ正面なのですこしまぶしそうにしながら号令をだんだんかけて、とうとうみんなは昇降口から教室へはいました。そして礼がすむと先生は、

「ではみなさんきょうから勉強をはじめましょう。みなさんはちやんとお道具をもってきましたね。では一年生（と二年生）の人はお習字のお手本と硯すずりと紙を出して、二年生と四年生の人は算術帳と雑記帳と鉛筆を出して、五年生と六年生の人は国語の本を出してくだ

さい。」

さあするとあつちでもこつちでも大きわぎがはじまりました。中にも三郎のすぐ横の四年生の机の佐太郎が、いきなり手をのぼして二年生のかよの鉛筆をひらりととってしまつたのです。かよは佐太郎の妹でした。するとかよは、

「うわあ、兄あいな、木ペン取とてわかんないな。」と言いながら取り返あそうとしますと佐太郎が、

「わあ、こいつおれのだなあ。」と言いながら鉛筆をふところの中へ入れて、あとはシナ人ひとがおじぎするときのように両手を袖そでへ入れて、机へぴったり胸むねをくつつけました。するとかよは立つて来て、

「兄あいな、兄あいなの木ペンはきのう小屋でなくしてしまつたけなあ。よこせつたら。」と言いながら一生けん命とり返かそうとしましたが、どうしても佐太郎は机にくつついた大きな蟹かにの化石いしみたいになつていたので、とうとうかよは立つたまま口を大きくまげて泣なきだしそうになりました。

すると三郎は国語の本をちゃんと机にのせて困こつたようにしてこれを見ていましたが、かよがとうとうぼろぼろ涙なみだをこぼしたのを見ると、だまって右手みぎに持もつていた半分はんぶんばかりになつた鉛筆えんぴつを佐太郎の目の前の机いしに置おきました。

すると佐太郎はにわかになんて元気になって、むっくり起き上がりました。そして、

「くれる？」と三郎にききました。三郎はちよつとまごついたようでしたが覚悟したように、「うん。」と言いました。すると佐太郎はいきなりわらい出してふところの鉛筆をかよの小さな赤い手に持たせました。

先生は向こうで一年生の子の硯すずりに水をついでやったりしていましたし、嘉助は三郎の前ですから知りませんでした。一郎はこれをいちばんうしろでちゃんと見ていました。そしてまるでなんと云つたらいいかわからない、変な気持ちがして齒をきりきり言わせました。

「では二年生のひとはお休みの前にならつた引き算をもう一ぺん習つてみましょう。これを勘定してごらん下さい。」先生は黒板にと書きました。二年生のこどもらはみんな一生けん命にそれを雑記帳にうつしました。かよも頭を雑記帳へくつつけるようにしています。「四年生の人はこれを置いて。」と書きました。

四年生は佐太郎をはじめ喜蔵も甲助こうすけもみんなそれをうつしました。

「五年生の人は読本とくほんの（二字空白）ページの（二字空白）課をひらいて声をたてないで読めるだけ読んでごらん下さい。わからない字は雑記帳へ拾つておくのです。」五年生も

25

— 12



みんな言われたとおりしはじめました。

「一郎さんは読本の（二字空白）ページをしらべてやはり知らない字を書き抜いてください。」

それがすむと先生はまた教壇をおりて、一年生の習字を一人一人見てあるきました。

三郎は両手で本をちゃんと机の上へもって、言われたところを息もつかずじつと読んでいました。けれども雑記帳へは字を一つも書き抜いていませんでした。それはほんとうに知らない字が一つもないのか、たった一本の鉛筆を佐太郎にやってしまったためか、どちらともわかりませんでした。

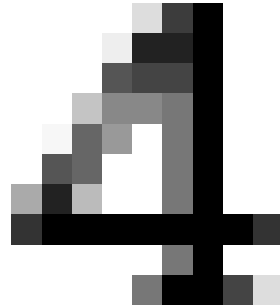
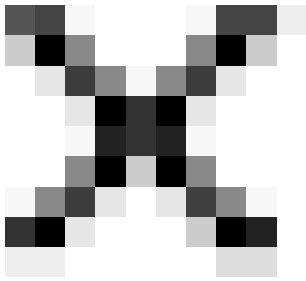
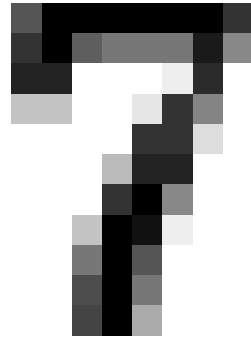
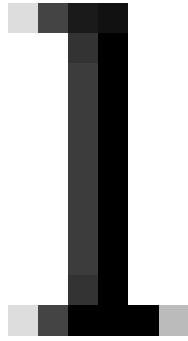
そのうち先生は教壇へ戻って二年生と四年生の算術の計算をして見せてまた新しい問題を出すと、今度は五年生の生徒の雑記帳へ書いた知らない字を黒板へ書いて、それになとわけをつけました。そして、

「では嘉助さん、ここを読んで。」と言いました。

嘉助は二三度ひつかかりながら先生に教えられて読みました。

三郎もだまって聞いていました。

先生も本をとって、じつと聞いていましたが、十行ばかり読むと、



「そこまで。」と言ってこんどは先生が読みました。

そうして一まわり済むと、先生はだんだんみんなの道具をしまわせました。

それから「ではここまで。」と言って教壇に立ちますと一郎がうしろで、

「気をつけい。」と言いました。そして礼がすむと、みんな順に外へ出てこんどは外へならばずにみんな別れ別れになって遊びました。

二時間目は一年生から六年生までみんな唱歌でした。そして先生がマンドリンを持って出て来て、みんなはいままでに習ったのを先生のマンドリンについて五つもうたいました。

三郎もみんな知っていて、みんなどんどん歌いました。そしてこの時間はたいへん早くたつてしまいました。

三時間目になるとこんどは二年生と四年生が国語で、五年生と六年生が数学でした。先生はまた黒板に問題を書いて五年生と六年生に計算させました。しばらくたつて一郎が答えを書いてしまうと、三郎のほうをちよつと見ました。

すると三郎は、どこから出したか小さな消し炭で雑記帳の上へがりがり大きく運算していたのです。

次の朝、空はよく晴れて谷川はさらさら鳴りました。一郎は途中で嘉助と佐太郎と悦治をさそっていつしよに三郎のうちのほうへ行きました。

学校の少し下流で谷川をわたって、それから岸で楊やなぎの枝をみんな一本ずつ折って、青い皮をくるくるはいで鞭むちをこしらえて手でひゅうひゅう振りながら、上の野原への道をだんだんのぼって行きました。みんなは早くも登りながら息をはあはあしました。

「又三郎ほんとにあそこのわき水まで来て待ちでるべが。」

「待ちでるんだ。又三郎うそこがないもな。」

「ああ暑う、風吹げばいいな。」

「どごがらだが風吹いでるぞ。」

「又三郎吹がせでらべも。」

「なんだがお日さんぼやっとして来たな。」

空に少しばかりの白い雲が出ました。そしてもうだいぶのぼっていました。谷のみんなの家がずうつと下に見え、一郎のうちの木小屋の屋根が白く光っています。

道が林の中に入り、しばらく道ははじめじめして、あたりは見えなくなりました。そしてまもなくみんなは約束のわき水の近くに来ました。するとそこから、

「おうい。みんな来たかい。」と三郎の高く叫ぶ声がしました。

みんなはまるでせかせかと走つてのぼりました。向こうの曲がり角かどの所に三郎が小さなくちびるをきつと結んだまま、三人のかけ上つて来るのを見ていました。

三人はやつと三郎の前まで来ました。けれどもあんまり息がはあはあしてすぐには何も言えませんでした。嘉助などはあんまりもどかしいものですから、空へ向いて「ホツホウ。」と叫んで早く息を吐いてしまおうとしました。すると三郎は大きな声で笑いました。

「ずいぶん待つたぞ。それにきようは雨が降るかもしれないそうだよ。」

「そだら早く行くべすさ。おらまんつ水飲んでぐ。」三人は汗をふいてしゃがんで、まっ白な岩からごぼごぼ噴ふきだす冷たい水を何べんもすくつてのみました。

「ぼくのうちはここからすぐなんだ。ちようどあの谷の上あたりなんだ。みんなで帰りに寄ろうねえ。」

「うん。まんつ野原さ行くべすさ。」

みんながまたあるきはじめてときわき水は何かを知らせるようにぐうつと鳴り、そこらの木もなんだかざあつと鳴つたようでした。

五人は林のすその藪やぶの間を行つたり岩かけの小さくくずれる所を何べんも通つたりして、

もう上の野原の入り口に近くなりました。

みんなはそこまで来ると来たほうからまた西のほうをながめました。

光つたりかげつたり幾通りにも重なったたくさんの丘の向こうに、川に沿ったほんとうの野原がぼんやり碧くひろがっているのです。

「ありや、あいづ川だぞ。」

「春日明神さんの帯のようだな。」三郎が言いました。

「何のようだぞ。」一郎がきました。

「春日明神さんの帯のようだ。」

「うな神さんの帯見だごとあるが。」

「ぼく北海道で見たよ。」

みんなはなんのことだかわからずだまつてしまいました。

ほんとうにそこはもう上の野原の入り口で、きれいに刈られた草の中に一本の大きな栗の木が立って、その幹は根もとの所がまつ黒に焦げて大きな洞のようになり、その枝には古い縄や、切れたわらじなどがつるしてありました。

「もう少し行ぐづどみんなして草刈ってるぞ。それから馬のいるどごもあるぞ。」一郎は

言いながら先に立つて刈った草のなかの一ぽんみちをぐんぐん歩きました。

三郎はその次に立つて、

「ここには熊くまいから馬をはなしておいてもいいなあ。」と言って歩きました。

しばらく行くとみちばたの大きな櫓なうらの木の下に、縄で編んだ袋が投げ出してあつて、たくさんの草たばがあつちにもこつちにもころがつていました。

せなかに草束をしよつた二匹の馬が、一郎を見て鼻をぶるぶる鳴らしました。

「兄あいな、いるが。兄あいな、来たぞ。」一郎は汗をぬぐいながら叫びました。

「おおい。ああい。そこにいろ。今行くぞ。」ずうつと向こうのくぼみで、一郎のにいさんの声がしました。

日はぼつと明るくなり、にいさんがそつちの草の中から笑つて出て来ました。

「善ゆぐ来たな。みんなも連れで来たのが。善ゆぐ来た。戻りに馬こ連れでてけろな。きょうあ午ひるまがらきつと曇る。おらもう少し草集めて仕舞しむがらな、うなだ遊ばばあの土手の中さはいつてろ。まだ牧馬の馬二十匹ばかりはいるがらな。」

にいさんは向こうへ行こうとして、振り向いてまた言いました。

「土手がら外さ出はるなよ。迷つてしまふづどあぶないがらな。午ひるまになつたらまた来る

がら。」

「うん。土手の中にいるがら。」

そして一郎のいさんは行ってしまいました。

空にはうすい雲がすっかりかかり、太陽は白い鏡のようになって、雲と反対に馳はせました。風が出て来てまだ刈っていない草は一面に波を立てます。一郎はさきにたつて小さなみちをまつすぐに行く、まもなくどてになりました。その土手の一とこちぎれたところに二本の丸太の棒を横にわたしてありました。悦治がそれをくぐろうとしますと、嘉助が、「おらこつたなものはずせだぞ。」と言いながら片っぽうのはじをぬいて下におろしましたのでみんなはそれをはね越えて中にはいました。

向こうの少し小高いところにてかてか光る茶いろの馬が七匹ばかり集まって、しつぽをゆるやかにばしやばしやふっているのです。

「この馬みんな千円以上するづもな。来年がらみんな競馬さも出はるのだづぢやい。」一郎はそばへ行きながら言いました。

馬はみんなままでさびしくつてしようなかつたというように一郎たちのほうへ寄ってきました。そして鼻づらをずうつとのばして何かほしそうにするのです。

「ははあ、塩をけるづのだな。」みんなは言いながら手を出して馬になめさせたりしましたが、三郎だけは馬になれていないらしく気味わるそうに手をポケットへ入れてしまいました。

「わあ、又三郎馬おっかながるぢやい。」と悦治が言いました。すると三郎は、

「こわくなんかないやい。」と言いながらすぐポケットの手を馬の鼻づらへのぼしましたが、馬が首をのぼして舌をべろりと出すと、さつと顔いろを変えてすばやくまた手をポケットへ入れてしまいました。

「わあい、又三郎馬おっかながるぢやい。」悦治がまた言いました。すると三郎はすっかり顔を赤くしてしばらくもじもじしていました。

「そんなら、みんなで競馬やるか。」と言いました。

競馬ってどうするのかとみんな思いました。

すると三郎は、

「ぼく競馬何べんも見たぞ。けれどもこの馬みんな鞍くらがないから乗れないや。みんなで一匹ずつ馬を追って、はじめに向こうの、そら、あの大きな木のところに着いたものを一等にしよう。」

「そいづおもしろいな。」嘉助が言いました。

「しからえるぞ。牧夫に見つけられえでがら。」

「大丈夫だよ。競馬に出る馬なんか練習をしていないといけないんだい。」三郎が言いました。

「よしおらこの馬だぞ。」

「おらこの馬だ。」

「そんならぼくはこの馬でもいいや。」みんなは楊やなぎの枝えだや萱かやの穂ほでしゆうと言いながら馬を軽く打ちました。

ところが馬はちつともびくともしませんでした。やはり下へ首をたれて草をかいたり、首をのびしてそこのけしきをもつとよく見るといようにしているのです。

一郎がそこで両手をぴしやんと打ち合わせて、だあ、と言いました。

するとにわかにな七匹ともまるでたてがみをそろえてかけ出したのです。

「うまあい。」嘉助ははね上がって走りました。けれどもそれはどうも競馬にはならないのでした。

第一、馬はどこまでも顔をならべて走るのでしたし、それにそんなに競馬するくらい早

く走るのでもなかったのです。それでもみんなはおもしろがって、だあだと言いながら一生けん命そのあとを追いました。

馬はすこし行くと立ちどまりそうになりました。みんなもすこしはあはあしましたが、こらえてまた馬を追いました。するといつか馬はぐるつとさっきの小高いところをまわつて、さつき五人ではいって来たどての切れた所へ来たのです。

「あ、馬出はる、馬出はる。押えろ 押えろ。」一郎はまっ青さおになって叫びました。じつさい馬はどての外へ出たのらしいのでした。どンドン走つて、もうさっきの丸太の棒を越えそうになりました。

一郎はまるであわてて、

「どう、どう、どうどう。」と言いながら一生けん命走つて行つて、やつとそこへ着いてまるでころぶようにしながら手をひろげたときは、そのときはもう二匹は柵さくの外へ出ていたのです。

「早く来て押えろ。早く来て。」一郎は息も切れるように叫びながら丸太棒をもとのようにしました。

四人は走つて行つて急いで丸太をくぐつて外へ出ますと、二匹の馬はもう走るでもなく、

どての外に立つて草を口で引っぱって抜くようにしています。

「そろそろど押えろよ。そろそろど。」と言いながら一郎は一びきのくつわについた札のところをしつかり押えました。嘉助と三郎がもう一匹を押えようとそばへ寄りますと、馬はまるでおどろいたようにどてへ沿って一目散に南のほうへ走ってしまいました。

「兄^{あい}な、馬あ逃げる、馬あ逃げる。兄^{あい}な、馬逃げる。」とうしろで一郎が一生けん命叫んでいます。三郎と嘉助は一生けん命馬を追いました。

ところが馬はもう今度こそほんとうに逃げるつもりらしかったのです。まるで丈^{たけ}ぐらある草をわけて高みになったり低くなったり、どこまでも走りました。

嘉助はもう足がしびれてしまって、どこをどう走っているのかわからなくなりました。それからまわりがまつ蒼^{さお}になって、ぐるぐる回り、とうとう深い草の中に倒れてしまいました。馬の赤いたてがみと、あとを追って行く三郎の白いシャツポが終わりにちらっと見えました。

嘉助は、仰向けになって空を見ました。空がまつ白に光って、ぐるぐる回り、そのこちらを薄いねずみ色の雲が、速く速く走っています。そしてカンカン鳴っています。

嘉助はやつと起き上がって、せかせか息しながら馬の行ったほうに歩き出しました。草

の中には、今馬と三郎が通つた跡らしく、かすかな道のようなものがありました。嘉助は笑いました。そして、（ふん、なあに馬どこかでこわくなつてのっこり立ってるさ、）と思ひました。

そこで嘉助は、一生懸命それをつけて行きました。

ところがその跡のようなのは、まだ百歩も行かないうちに、おとこえしや、すてきに背の高いあざみの中で、二つにも三つにも分かれてしまつて、どれがどれやらいつこうわからなくなつてしまいました。

嘉助は「おうい。」と叫びました。

「おう。」とどこかで三郎が叫んでいるようです。思い切つて、そのまん中のを進みました。

けれどもそれも、時々切れたり、馬の歩かないような急な所を横ざまに過ぎたりするのでした。

空はたいへん暗く重くなり、まわりがぼうつとかすんで来ました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が切れ切れになつて目の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

（ああ、こいつは悪くなつて来た。みんな悪いことはこれから集^{たが}つてやって来るのだ。）

と嘉助は思いました。全くそのとおり、にわかには馬の通った跡は草の中でなくなっていました。

(ああ、悪くなった、悪くなった。) 嘉助は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ言ったり、さらさら鳴ったりしました。霧がことに滋しげく
なつて、着物はすっかりしめつてしまいました。

嘉助は咽喉のどいっばい叫びました。

「一郎、一郎、こつちさ来う。」ところがなんの返事も聞こえません。黒板から降る白墨の粉のような、暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまわり、あたりがにわかにはインとして、陰気に陰気になりました。草からは、もうしずくの音がポタリポタリと聞こえて来ます。

嘉助は、もう早く一郎たちの所へ戻ろうとして急いで引返しました。けれどもどうも、それは前に来た所とは違っていたようでした。第一、あざみがあんまりたくさんありません。たし、それに草の底にさつきなかつた岩かけが、たびたびころがっていました。そしてとうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり目の前に現われました。すすきがざわざわざわつと鳴り、向こうのほうは底知れずの谷のように、霧の中に消えているではありません。

んか。

風が来ると、すすきの穂は細いたくさんの手をいっぱいのぼして、忙しく振って、

「あ、西さん、あ、東さん、あ、西さん、あ、南さん、あ、西さん。」なんて言っているようでした。

嘉助はあんまり見つともなかったので、目をつむって横を向きました。そして急いで引返しました。小さな黒い道がいきなり草の中に出て来ました。それはたくさんの馬のひづめの跡でできあがっていたのです。嘉助は夢中で短い笑い声をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはぼが五寸ぐらいになったり、また三尺ぐらいに変わったたり、おまけになんだかぐるつと回っているように思われました。そして、とうとう大きくなってぺんの焼けた栗くりの木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも別れてしまいました。

そこはたぶんは、野馬の集まり場所であつたでしょう。霧の中に丸い広場のように見えたのです。

嘉助はがっかりして、黒い道をまた戻りはじめました。知らない草穂が静かにゆらぎ、

少し強い風が来る時は、どこかで何か合図をしてでもいるように、一面の草が、それ来たつとみなからだを伏せて避けてました。

空が光つてキインキインと鳴っています。

それからすぐ目の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらわれました。嘉助はしばらく自分の目を疑つて立ちどまっていたが、やはりどうしても家らしかったので、こわごわもつと近寄つて見ますと、それは冷たい大きな黒い岩でした。

空がくるくるくるつと白く揺らぎ、草がバラツと一度にしくを払いました。

(間違つて原の向こう側へおりれば、又三郎もおれも、もう死ぬばかりだ。)と嘉助は半分思うように半分つぶやくようにしました。それから叫びました。

「一郎、一郎、いるが。一郎。」

また明るくなりました。草がみないっせいによろこびの息をします。

「伊佐戸いさどの町まちの、電気工夫わらわすの童わらわすあ、山男やまおに手足てあしいしばらえてたふだ。」といつかだれかの話した言葉が、はつきり耳に聞こえて来ます。

そして、黒い道がにわかに消えてしまいました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて来ました。

空が旗のようにぱたぱた光って飜り、火花がパチパチパチッと燃えました。嘉助はどうとう草の中に倒れてねむってしまいました。

*

そんなことはみんなどこかの遠いできごとのようでした。

もう又三郎がすぐ目の前に足を投げだしてだまって空を見あげているのです。いつかいつものねずみいろの上着の上にガラスのマントを着ているのです。それから光るガラスの靴くつをはいているのです。

又三郎の肩には栗くりの木の影が青く落ちています。又三郎の影は、また青く草に落ちていきます。そして風がどんどん吹いているのです。

又三郎は笑いもしなければ物も言いません。ただ小さなくちびるを強そうにきつと結んだまま黙ってそらを見えています。いきなり又三郎はひらっとそらへ飛びあがりました。ガラスのマントがギラギラ光りました。

*

ふと嘉助は目をひらきました。灰いろの霧が速く速く飛んでいます。

そして馬がすぐ目の前にのっそりと立っていたのです。その目は嘉助を恐れて横のほう

を向いていました。

嘉助ははね上がって馬の名札を押えました。そのうしろから三郎がまるで色のなくなつたくちびるをきつと結んでこつちへ出てきました。

嘉助はふるふるふるえました。

「おうい。」霧の中から一郎のにいさんの声がしました。雷もごろごろ鳴っています。

「おうい、嘉助。いるが。嘉助。」一郎の声もしました。嘉助はよろこんでとびあがりました。

「おおい。いる、いる。一郎。おおい。」

一郎のにいさんと一郎が、とつぜん目の前に立ちました。嘉助はにわか泣き出ししました。

「捜したぞ。あぶながったぞ。すっかりぬれだな。どう。」一郎のにいさんはなれた手つきで馬の首を抱いて、もつてきたくつわをすばやく馬のくちにはめました。

「さあ、あべさ。」

「又三郎びっくりしたべあ。」一郎が三郎に言いました。三郎はだまって、やっぱりきつと口を結んでうなずきました。

みんなは一郎のにいさんについて、ゆるい傾斜を二つほどのぼり降りしました。それから、黒い大きな道について、しばらく歩きました。

稲光りが二度ばかり、かすかに白くひらめきました。草を焼くにおいがして、霧の中を煙がぼうつと流れています。

一郎のにいさんが叫びました。

「おじいさん。いだ、いだ。みんないだ。」

おじいさんは霧の中に立っていて、

「ああ心配した、心配した。ああよかった。おお嘉助。寒がべあ、さあはいれ。」と言いました。嘉助は一郎と同じようにやはりこのおじいさんの孫なようでした。

半分に焼けた大きな栗くりの木の根もとに、草で作った小さな囲いがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えていました。

一郎のにいさんは馬を櫓ならの木につなぎました。

馬もひひんと鳴いています。

「おおむぞやな。な。なんぼが泣いだがな。そのわろは金山掘りのわろだな。さあさあみんな団子たべろ。食べろ。な、今こつちを焼ぐがらな。全体どこまで行ってだった。」

「笹長根ささながねのおり口だ。」と一郎のにいきさんが答えました。

「あぶないがった。あぶないがった。向こうさ降りだら馬も人もそれっ切りだったぞ。さあ嘉助、団子食べる。このわるもたべろ。さあさあ、こいづも食べる。」

「おじいさん。馬置いてくるが。」と一郎のにいきさんが言いました。

「うんうん。牧夫来るとまだやがましながらな、したども、も少し待で。またすぐ晴れる。ああ心配した。おれも虎とらこ山やまの下まで行つて見で来た。はあ、まんつよがった。雨も晴れる。」

「けさほんとに天気よがったのにな。」

「うん。またよくなるさ、あ、雨漏つて来たな。」

一郎のにいきさんが出て行きました。天井がガサガサガサ言います。おじいさんが笑いながらそれを見上げました。

にいきさんがまたはいって来ました。

「おじいさん。明るくなった。雨あ霽はれだ。」

「うんうん、そうが。さあみんなよつく火にあだれ、おらまた草刈るがらな。」

霧がふつと切れました。日の光がさつと流れてはいりました。その太陽は、少し西のほ

うに寄ってかかり、幾片かの蠟ろうのような霧が、逃げおくれてしかたなしに光りました。

草からはしずくがきらきら落ち、すべての葉も茎も花も、ことしの終わりの日の光を吸っています。

はるかな西の碧あおい野原は、今泣きやんだようにまぶしく笑い、向こうの栗くりの木は青い後光を放ちました。

みんなはもう疲れて一郎をさきに野原をおりました。わき水のところで三郎はやつぱりだまって、きつと口を結んだままみんなに別れて、じぶんだけおとうさんの小屋のほうへ帰って行きました。

帰りながら嘉助が言いました。

「あいづやつぱり風の神だぞ。風の神の子っ子だぞ。あそごさ二人して巢食ってるんだぞ。」

「そでないよ。」一郎が高く言いました。

次の日は朝のうちは雨でしたが、二時間目からだんだん明るくなって三時間目の終わりの十分休みにはとうとうすっかりやみ、あちこちに削ったような青ぞらもできて、その下

をまつ白なうろこ雲がどんどん東へ走り、山の萱かやからも栗の木からも残りの雲が湯げのよ
うに立ちました。

「下がつたら葡萄蔓えびづるとりに行かないが。」耕助が嘉助にそつと言いました。

「行く行く。三郎も行かないが。」嘉助がさそいました。耕助は、

「わあい、あそご三郎さ教えるやないぢや。」と言いましたが三郎は知らないで、

「行くよ。ぼくは北海道でもとつたぞ。ぼくのおかあさんは樽たるへ二つつ漬つけたよ。」と言
いました。

「葡萄ぶどうとりにおらも連れでがないが。」二年生の承しょう吉きちも言いました。

「わがないぢや。うなどさ教えるやないぢや。おら去年な新しいどご見つけだぢや。」

みんなは学校の済むのが待ち遠しかったのでした。五時間目が終わると、一郎と嘉助と
佐太郎と耕助と悦治と三郎と六人で学校から上流のほうへ登って行きました。少し行くと
一けんの藁わらやねの家があつて、その前に小さなたばこ畑がありました。たばこの木はもう
下のほうの葉をつんであるので、その青い茎が林のようにきれいにならんでいかにもおも
しろそうでした。

すると三郎はいきなり、

「なんだい、この葉は。」と言いながら葉を一枚むしって一郎に見せました。すると一郎はびっくりして、

「わあ、又三郎、たばこの葉とるづど専売局にうんとしかられるぞ。わあ、又三郎何してとつた。」と少し顔いろを悪くして言いました。みんなも口々に言いました。

「わあい。専売局であ、この葉一枚ずつ数えて帳面さつけでるだ。おら知らないぞ。」
「おらも知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」みんな口をそろえてはやしました。

すると三郎は顔をまっ赤かにして、しばらくそれを振り回して何か言おうと考えていたが、

「おら知らないでとつたんだい。」とおこつたように言いました。

みんなはこわそうに、だれか見ていないかというように向こうの家を見ました。たばこばたけからもうもうとあがる湯げの向こうで、その家はしいんとしてだれもいたようではありませんでした。

「あの家一年生の小助こすけの家だぢやい。」嘉助が少しなだめるように言いました。ところが耕助ははじめからじぶんの見つけた葡萄ぶどう藪やぶへ、三郎だのみんなあんまり来ておもしろく

なかつたもんですから、意地悪くもいちど三郎に言いました。

「わあ、三郎なんぼ知らないたつてわがないんだぢや。わあい、三郎もどのおりにしてまゆんだであ。」

三郎は困つたようにしてまたしばらくだまつていましたが、

「そんなら、おいらここへ置いてくからいいや。」と言いながらさつきの木の間もとへそつとその葉を置きました。すると一郎は、

「早くあべ。」と言つて先にたつてあるきだしましたのでみんなもついて行きましたが、耕助だけはまだ残つて「ほう、おら知らないぞ。ありや、又三郎の置いた葉、あすごにあるぢやい。」なんて言つていたのでしたが、みんながどんどん歩きだしたので耕助もやつとついて来ました。

みんなは萱かやの間の小さなみちを山のほうへ少しのぼりますと、その南側に向いたくぼみに栗くりの木があちこち立つて、下には葡萄がもくもくした大きな藪やぶになっていました。

「ここおれ見つつけだのだからみんなあんまりとるやないぞ。」耕助が言いました。すると三郎は、

「おいら栗のほうをとるんだい。」といつて石を拾つて一つの枝へ投げました。青いのが

が一つ落ちました。

三郎はそれを棒きれでむいて、まだ白い栗を二つとりました。みんなは葡萄ぶどうのほうへ一生けん命でした。

そのうち耕助がも一つの藪やぶへ行こうと一本の栗くりの木の下の下を通りますと、いきなり上からしずくが一ぺんにぎつと落ちてきましたので、耕助は肩からせなかから水へはいったようになりました。耕助はおどろいて口をあいて上を見ましたら、いつか木の上に三郎がのぼつていて、なんだか少しわらいながらじぶんも袖そでぐちで顔をふいていたのです。

「わあい、又三郎何する。」耕助はうらめしそうに木を見あげました。

「風が吹いたんだい。」三郎は上でくつくつわらいながら言いました。

耕助は木の下をはなれてまた別の藪で葡萄をとりはじめました。もう耕助はじぶんでも持てないくらいあちこちへためていて、口も紫いろになってまるで大きく見えました。

「さあ、このくらい持つて戻らないが。」一郎が言いました。

「おら、もつと取つてぐぢや。」耕助が言いました。

そのとき耕助はまた頭からつめたいしずくをざあつとかぶりしました。耕助はまたびっくりしたように木を見上げましたが今度は三郎は木の上にはいませんでした。

けれども木の向こう側に三郎のねずみいろのひじも見えていましたし、くつくつ笑う声もしましたから、耕助はもうすっかりおこってしまいました。

「わあい又三郎、まだひとさ水掛けだな。」

「風が吹いたんだい。」

みんなはどつと笑いました。

「わあい又三郎、うなそごで木ゆすつたけあなあ。」

みんなはどつとまた笑いました。

すると耕助はうらめしそうにしばらくだまって三郎の顔を見ながら、

「うあい又三郎、汝^{うな}などあ世界になくてもいいなあ。」

すると三郎はするそうに笑いました。

「やあ耕助君、失敬したねえ。」

耕助は何かもつと別のことを言おうと思いましたが、あんまりおこってしまつて考え出すことができませんでしたのでまた同じように叫びました。

「うあい、うあいだ、又三郎、うなみだいな風^{かぜ}など世界じゆうになくてもいいなあ、うわあい。」

「失敬したよ、だってあんまりきみもぼくへ意地悪をするもんだから。」三郎は少し目をパチパチさせて気の毒そうに言いました。けれども耕助のいかりはなかなか解けませんでした。そして三度同じことをくりかえしたのです。

「うわい又三郎、風などあ世界じゆうになくてもいいな、うわい。」

すると三郎は少しおもしろくなつたようでもたくつくつ笑いだしてたずねました。

「風が世界じゆうになくつてもいいつてどういうんだい。いいと箇条をたてていつてごらん。そら。」三郎は先生みたいな顔つきをして指を一本だしました。

耕助は試験のようだし、つまらないことになつたと思つてたいへんくやしかつたのですが、しかたなくしばらく考えてから言いました。

「汝^{うな}など悪戯^{わるさ}ぶりさな、傘^{かさ}ぶつこわしたり。」

「それからそれから。」三郎はおもしろそうに一足進んで言いました。

「それから木折つたり転覆したりさな。」

「それから、それからどうだい。」

「家もぶつこわさな。」

「それから。それから、あとはどうだい。」

「あかしも消さな。」

「それからあとは？　それからあとは？　どうだい。」

「シヤツプもとばさな。」

「それから？　それからあとは？　あとはどうだい。」

「笠^{かさ}もとばさな。」

「それからそれから。」

「それから、ラ、ラ、電信ばしらも倒さな。」

「それから？　それから？　それから？」

「それなら屋根もとばさな。」

「アアハハハ、屋根は家のうちだい。どうだいまだあるかい。それから、それから？」

「それだから、ララ、それだからランプも消さな。」

「アアハハハハ、ランプはあかしのうちだい。けれどそれだけかい。え、おい。それから？　それからそれから。」

耕助はつまってしまいました。たいていもう言ってしまったのですから、いくら考えてももうできませんでした。

三郎はいよいよおもしろそうに指を一本立てながら、

「それから？ それから？ ええ？ それから？」と言うのでした。

耕助は顔を赤くしてしばらく考えてからやつと答えました。

「風車もぶっこわさな。」

すると三郎はこんどこそはまるで飛び上がって笑ってしまいました。みんなも笑いました。笑って笑って笑いました。

三郎はやつと笑うのをやめて言いました。

「そらごらん、とうとう風車などを言っちゃったろう。風車なら風を悪く思っちゃいないんだよ。もちろん時々こわすこともあるけれども回してやる時のほうがずっと多いんだ。

風車ならちつとも風を悪く思っていないんだ。それに第一お前のさつきからの数えようはあんまりおかしいや。ララ、ララ、ばかり言ったんだろう。おしまいにととう風車なんか数えちゃった。ああおかしい。」

三郎はまた涙の出るほど笑いました。

耕助もさつきからあんまり困ったためにおこっていたのもだんだん忘れて来ました。そしてつい三郎といっしょに笑い出してしまったのです。すると三郎もすっかりきげんを直

して、

「耕助君、いたずらをして済まなかつたよ。」と言いました。

「さあそれであ行ぐべな。」と一郎は言いながら三郎にぶどうを五ふさばかりくれました。三郎は白い栗をみんなに二つずつ分けました。そしてみんなは下のみちまでいっしょにおりて、あとはめいめいのうちへ帰つたのです。

次の朝は霧がじめじめ降つて学校のうしろの山もぼんやりしか見えませんでした。ところがきょうも二時間目ころからだんだん晴れてまもなく空はまっ青になり、日はかんかん照つて、お午ひるになつて一、二年が下がつてしまふとまるで夏のように暑くなつてしまいました。

ひるすぎは先生もたびたび教壇で汗をふき、四年生の習字も五年生六年生の図画もまるでむし暑くて、書きながらうとうとするのでした。

授業が済むとみんなはすぐ川下のほうへそろつて出かけました。嘉助が、「又三郎、水泳ぎに行かないが。小さいやぶど今ころみんな行つてるぞ。」と言いましたので三郎もついて行きました。

そこはこの前上の野原へ行つたところよりも、もう少し下流で右のほうからも一つの谷川がはいって来て、少し広い河原になり、すぐ下流は大きなさいかちの木のはえた崖がけになつていたのでした。

「おおい。」とききに來ていることもらはだかで両手をあげて叫びました。一郎やみなは、河原のねむの木の間をまるで徒競走のように走つて、いきなりきものをぬぐとすぐどぶんどぶんと水に飛び込んで両足をかわるがわる曲げて、だあんだあんと水をたたくようにしながら斜めにならんで向こう岸へ泳ぎはじめました。前にいたこともらもあとから追い付いて泳ぎはじめました。三郎もきものをぬいでみんなのあとから泳ぎはじめましたが、途中で声をあげてわらいました。すると向こう岸についた一郎が、髪をあざらしのようにしてくちびるを紫にしてわくわくふるえながら、

「わあ又三郎、何してわらつた。」と言いました。

三郎はやつぱりふるえながら水からあがつて、

「この川冷たいなあ。」と言いました。

「又三郎何してわらつた？」一郎はまたききました。

三郎は、

「おまえたちの泳ぎ方はおかしいや。なぜ足をだぶだぶ鳴らすんだい。」と言いながらまた笑いました。

「うわあい。」と一郎は言いましたが、なんだかきまりが悪くなったように、

「石取りさないが。」と言いながら白い丸い石をひろいました。

「するする。」こどもらがみんな叫びました。

「おれそれであ、あの木の上から落とすがらな。」と一郎は言いながら崖がけの中ごろから出ているさいかちの木へするするのぼって行きました。そして、

「さあ落とすぞ。一二三。」と言いながらその白い石をどぶん、と淵ふちへ落としました。

みんなはわれ勝ちに岸からまつさかさまに水にとび込んで、青白いらつこのような形をして底へもぐって、その石をとろうとしました。

けれどもみんな底まで行かないに息がつまって浮かびだして来て、かわるがわるふうとそこらへ霧をふきました。

三郎はじつとみんなのするのを見ていましたが、みんなが浮かんできてからじぶんもどぶんとはいって行きました。けれどもやつぱり底まで届かずに浮いてきたのでみんなはどつと笑いました。そのとき向こうの河原のねむの木のところを大人おとなが四人、肌ぬぎになっ

たり、網をもつたりしてこつちへ来るのでした。

すると一郎は木の上でまるで声をひくくしてみんなに叫びました。

「おお、発破はつぱだぞ。知らないふりしてろ。石とりやめで早ぐみんな下流しもさがれ。」そこでみんなは、なるべくそつちを見ないふりをしながら、いつしよに砥石とishiをひろつたり、鶺鴒せいを追つたりして、発破のことなぞ、すこしも気がつかないふりをしていました。

すると向こうの淵ふちの岸では、下流の坑夫しやうすけをしていた庄助しやうすけが、しばらくあちこち見まわしてから、いきなりあぐらをかいて砂利じやりの上へすわってしまいました。それからゆつくり腰からたばこ入れをとって、きせるをくわえてぱくぱく煙をふきだしました。奇体だと思っていましたら、また腹かけから何か出しました。

「発破はつぱだぞ、発破はつぱだぞ。」とみんな叫びました。

一郎は手をふってそれをとめました。庄助は、きせるの火をしずかにそれへうつしました。うしろにいた一人はすぐ水にはいつて網をかまえました。庄助はまるで落ちついて、立って一あし水にはいるとすぐその持ったものを、さいかちの木の下のところへ投げこみました。するとまもなく、ぼおというようなひどい音がして水はむくつと盛りあがり、それからしばらくそこらあたりがきいんと鳴りました。

向むかこうの大人おとなたちはみんな水へはいりました。

「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ。」と一郎が言いました。まもなく耕助は小指ぐらいの茶いろなかじかが横向きになつて流れて来たのをつかみましたし、そのうしろでは嘉助が、まるで瓜うりをすするときのような声を出しました。それは六寸ぐらいある鮒ふなをとつて、顔をまっ赤かにしてよろこんでいたのです。それからみんなとつて、わあわあよろこびました。

「だまつてろ、だまつてろ。」一郎が言いました。

そのとき向むかこうの白い河原を肌はだぬぎになつたり、シャツだけ着たりした大人が五六人かけて来ました。そのうしろからはちようど活動写真のように、一人の網シャツを着た人が、はだか馬に乗つてまっしぐらに走つて来ました。みんな発破の音を聞いて見に来たのです。庄助はしばらく腕を組んでみんなののを見ていましたが、

「さつぱりいないな。」と言いました。すると三郎がいつのまにか庄助のそばへ行つていました。そして中ぐらいの鮒を二匹、

「魚さかな返すよ。」と行って河原へ投げるように置きました。すると庄助が、

「なんだこの童わらわすあ、きたいなやづだな。」と言いながらじろじろ三郎を見ました。

三郎はだまつてこつちへ歸つてきました。

庄助は変な顔をしてみています。みんなはどつとわらいました。

庄助はだまつてまた上流へ歩きだしました。ほかのおとなたちもついて行き、網シャツの人は馬に乗つて、またかけて行きました。耕助が泳いで行つて三郎の置いて来た魚を持つてきました。みんなはそこでまたわらいました。

「発破かけたら、雑魚撒かせ。」嘉助が河原の砂つばの上で、びよんびよんはねながら高く叫びました。

みんなはとつた魚を石で囲んで、小さな生け州をこしらえて、生きかえつてももう逃げて行かないようにして、また上流のさいかちの木へのぼりはじめました。

ほんとうに暑くなつて、ねむの木もまるで夏のようにぐったり見えましたし、空もまるで底なしの淵ふちのようになりました。

そのころだれかが、

「あ、生け州ぶつこわすところぞ。」と叫びました。見ると一人の変に鼻のどがった、洋服を着てわらじをはいた人が、手にはステッキみたいなものをもって、みんなの魚をぐちやぐちやかきまわしているのです。

その男はこつちへびちやびちや岸をあるいて来ました。

「あ、あいづ専売局だぞ。専売局だぞ。」佐太郎が言いました。

「又三郎、うなのとつた煙草たばこの葉めつけたんだで、うな、連れでぐさ来たぞ。」嘉助が言いました。

「なんだい。こわくないや。」三郎はきつと口をかねで言いました。

「みんな又三郎のごと囲んでろ、囲んでろ。」と一郎が言いました。

そこでみんなは三郎をさいかちの木のいちばん中の枝に置いて、まわりの枝にすつかり腰かけました。

「来た来た、来た来た。来たつ。」とみんなは息をこらしめました。

ところがその男は別に三郎をつかまえるふうでもなく、みんなの前を通りこして、それから淵ふちのすぐ上流の浅瀬を渡ろうとしました。それもすぐに川をわたるでもなく、いかにもわらじや脚絆きやはんのきたなくなつたのをそのまま洗うというふうに、もう何べんも行ったり来たりするもんですから、みんなはだんだんこわくなくなりましたが、そのかわり気持ちが悪くなってきました。

そこでとうとう一郎が言いました。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶのだ。いいか。

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生せんせ言うでないか。一、二、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生言うでないか。」

その人はびっくりしてこつちを見ましたけれども、何を言ったのかよくわからないというようすでした。そこでみんなはまた言いました。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、言うでないか。」

鼻のどがった人はすぱすと、煙草たばこを吸うときのような口つきで言いました。

「この水飲むのか、こちらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生言うでないか。」

鼻のどがった人は少し困ったようにして、また言いました。

「川をあるいてわるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生言うでないか。」

その人はあわてたのをごまかすように、わざとゆつくり川をわたって、それからアルプスの探検みたいな姿勢をとりながら、青い粘土と赤砂利あかじゃりの崖がけをななめにのぼって、崖の上のたばこ畑へはいつてしまいました。

すると三郎は、

「なんだい、ぼくを連れにきたんじやないや。」と言いながらまっさきにどぶんと淵ふちへとび込みました。

みんなもなんだか、その男も三郎も気の毒なようなおかしながらんとした気持ちになりながら、一人ずつ木からはねおりて、河原に泳ぎついて、魚さかなを手ぬぐいにつつんだり、手にもったりして家に帰りました。

次の朝、授業の前みんなが運動場で鉄棒にぶらさがったり、棒かくしをしたりしていますと、少し遅れて佐太郎が何かを入れた筈さるをそっとかかえてやって来ました。

「なんだ、なんだ。なんだ。」とすぐみんな走って行つてのぞき込みました。

すると佐太郎は袖そででそれをかくすようにして、急いで学校の裏の岩穴のところへ行きました。そしてみんなはいよいよあとを追って行きました。

一郎がそれをのぞくと、思わず顔いろを変えました。

それは魚の毒もみにつかう山椒さんしよの粉で、それを使うと発破はつぱと同じように巡査に押えられるのでした。ところが佐太郎はそれを岩穴の横の萱かやの中へかくして、知らない顔をして運動場へ帰りました。

そこでみんなはひそひそと、時間になるまでいつまでもその話ばかりしていました。

その日も十時ごろからやつぱりきのうのように暑くなりました。みんなはもう授業の済むのばかり待っていました。

二時になつて五時間目が終わると、もうみんな一目散に飛びだしました。佐太郎もまた箆をそつと袖でかくして、耕助だのみんなに囲まれて河原へ行きました。三郎は嘉助と行きました。みんなは町の祭りのときのガスのようなにおいの、むつとするねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵ぶちに着きました。すっかり夏のような立派な雲の峰が東でむくむく盛りあがり、さいかちの木は青く光って見えました。

みんな急いで着物をぬいで淵の岸に立つと、佐太郎が一郎の顔を見ながら言いました。

「ちやんと一列にならべ。いいか、魚さかな浮いて来たら泳いで行つてとれ。とつたくらい与やぞ。いいか。」

小さなこどもらはよろこんで、顔を赤くして押しあつたりしながらぞろつと淵ふちを囲みました。

ペ吉きちだの三四人はもう泳いで、さいかちの木の下まで行つて待つていました。

佐太郎が大威張りで、上流の瀬に行つて箆ざるをじゃぶじゃぶ水で洗いました。

みなしいんとして、水を見つめて立つていました。

三郎は水を見ないで向こうの雲の峰の上を通る黒い鳥を見ていました。一郎も河原にすわつて石をこちこちたたいていました。

ところが、それからよほどたつても魚は浮いて来ませんでした。

佐太郎はたいへんまじめな顔で、きちんと立つて水を見ていました。きのう発破はっぱをかけたときなら、もう十匹もとつていたんだとみんなは思いました。またずいぶんしばらくみんないんとして待ちました。けれどもやつぱり魚は一ぴきも浮いて来ませんでした。

「さつぱり魚、浮かばないな。」耕助が叫びました。佐太郎はびくつとしましたけれども、まだ一心に水を見ていました。

「魚さかなさつぱり浮かばないな。」ペ吉がまた向こうの木の下の下で言いました。するともう、みんなはがやがやと言い出して、みんな水に飛び込んでしまいました。

佐太郎はしばらくきまり悪そうに、しやがんで水を見ていましたけれど、とうとう立つて、

「鬼っこしないか。」と言いました。

「する、する。」みんなは叫んで、じゃんけんをするために、水の中から手を出しました。泳いでいたものは急いでせいせいの立つところまで行って手を出しました。

一郎も河原から来て手を出しました。そして一郎ははじめに、きのうあの変な鼻のどがった人の上つて行った崖がけの下の、青いぬるぬるした粘土のところを根っこにきめました。そこに取りついていけば、鬼は押えることができないというのでした。それから、はさみ無しの一人まげかちでじゃんけんをしました。

ところが悦治はひとりはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になりました。悦治は、くちびるを紫いろにして河原を走って、喜作きさくを押えたので鬼は二人になりました。それからみんなは、砂つばの上や淵ふちを、あっちへ行ったりこっちへ来たり、押えたり押えられたり、何べんも鬼っこをしました。

しまいにとうとう三郎一人が鬼になりました。三郎はまもなく吉郎をつかまえました。みんなはさいかちの木の下にいてそれを見ていました。すると三郎が、

「吉郎君、きみは上流かみから追つて来るんだよ。いいか。」と言いながら、じぶんはだまつて立つて見ていました。

吉郎は口をあいて手をひろげて、上流から粘土の上を追つて来ました。

みんなは淵ふちへ飛び込むしたくをしました。一郎は楊やなぎの木にのぼりました。そのとき吉郎が、あの上流の粘土が足についていたために、みんなの前ですべてころんでしまいました。

みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水にはいつたりして、上流の青い粘土の根に上がってしまいました。

「又三郎、来こ。」嘉助は立つて口を大きくあいて、手をひろげて三郎をばかにしました。すると三郎はさつきからよつほどおこつていたと見えて、

「ようし、見ていろよ。」と言いながら本気になって、ぎぶんと水に飛び込んで、一生けん命、そつちのほうへ泳いで行きました。

三郎の髪の毛が赤くてばしやばしやしているのに、あんまり長く水につかってくちびる

もすこし紫いろなので、子どもらはすっかりこわがってしまいました。

第一、その粘土のところはせまくて、みんながはれなかったのに、それにたいへんつるつるすべる坂になっていましたから、下のほうの四五人などは上の人につかまるようにして、やっと川へすべり落ちるのをふせいでいたのです。一郎だけが、いちばん上で落ちついて、さあみんな、とかなんとか相談らしいことをはじめました。みんなもそこで頭をあつめて聞いています。三郎はぼちやぼちや、もう近くまで行きました。

みんなはひそひそはなしています。すると三郎は、いきなり両手でみんなへ水をかけ出しました。みんなが、ばたばた防いでいましたら、だんだん粘土がすべって来て、なんだかすこうし下へずれたようになりました。

三郎はよろこんで、いよいよ水をはねとばしました。

すると、みんなはぼちやんぼちやんと一度にすべって落ちました。三郎はそれを片っぴしからつかまえました。一郎もつかまりました。嘉助がひとり、上をまわって泳いで逃げましたら、三郎はすぐに追い付いて押えたほかに、腕をつかんで四五へんぐるぐる引っぱりまわしました。嘉助は水を飲んだと見えて、霧をふいてごぼごぼむせて、

「おいらもうやめた。こんな鬼つこもうしない。」と言いました。小さな子どもらはみん

な砂利じやりに上がってしまいました。

三郎はひとりさいかちの木の下に立ちました。

ところが、そのときはもうそらがいつぱいの黒い雲で、楊やなぎも変まに白っぽくなり、山の草はしんしんとくらくなり、そこらはなんとも言われない恐ろしい景色にかわってしまいました。そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろごろと雷が鳴り出しました。と思うと、まるで山つなみのような音がして、一ぺんに夕立がやって来ました。風までひゅうひゅう吹きだしました。

淵ふちの水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまいました。

みんなは河原から着物をかかえて、ねむの木の下へ逃げこみました。すると三郎もなんだかはじめてこわくなったと見えて、さいかちの木の下からどぼんと水へはいつてみんなのほうへ泳ぎだしました。

すると、だれともなく、

「雨はざっこざっこ雨三郎、

風はどっこどっこ又三郎。」と叫んだものがありました。

みんなもすぐ声をそろえて叫びました。

「雨はぎっこぎっこ雨三郎、

風はどっこどっこ又三郎。」

三郎はまるであわてて、何かに足をひっぱられるようにして淵ふちからとびあがって、一目散にみんなのところへ走って来て、がたがたふるえながら、

「いま叫んだのはおまえらだちかい。」とききました。

「そでない、そでない。」みんないっしょに叫びました。

ペ吉がまた一人出て来て、

「そでない。」と言いました。

三郎は気味悪そうに川のほうを見ていましたが、色のあせたくちびるを、いつものようにきつとかんで、「なんだい。」と言いましたが、からだはやはりがくがくふるえています。

そしてみんなは、雨のはれ間を待って、めいめいのうちへ帰ったのです。

どつどつど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんも吹きとばせ

どつどど どどうど どどうど どどう

どつどど どどうど どどうど どどう

先ごろ、三郎から聞いたばかりのあの歌を一郎は夢の中でまたきいたのです。

びっくりしてはね起きて見ると、外ではほんとうにひどく風が吹いて、林はまるでほえるよう、あけがた近くの青ぐろいうすあかりが、障子や柵たなの上のちようちん箱や、家じゅういつぱいでした。一郎はすばやく帯をして、そして下駄げたをはいて土間をおり、馬屋の前を通つてくぐりをあけましたら、風がつめたい雨の粒といっしょにどつとはいって来ました。

馬屋のうしろのほうで何か戸がばたつと倒れ、馬はぶるつと鼻を鳴らしました。

一郎は風が胸の底までしみ込んだように思つて、はあと息を強く吐きました。そして外へかけだしました。

外はもうよほど明るく、土はぬれておりました。家の前の栗くりの木の列は変に青く白く見

えて、それがまるで風と雨とで今洗濯せんたくをするとでもいうように激しくもまれていました。青い葉も幾枚も吹き飛ばされ、ちぎられた青い栗のいがは黒い地面にたくさん落ちていました。空では雲がけわしい灰色に光り、どんどんどん北のほうへ吹きとばされていました。

遠くのほうの林はまるで海が荒れているように、ごんごんと鳴ったりぎつと聞こえたりするのです。一郎は顔いっぱい冷たい雨の粒を投げつけられ、風に着物をもって行かれそうになりながら、だまってその音をききすまし、じつと空を見上げました。

すると胸がさらさらと波をたてるように思いました。けれどもまたじつとその鳴ってほえてうなつて、かけて行く風をみていますと、今度は胸がどかどかとなつてくるのです。きのうまで丘や野原の空の底に澄みきつてしんとしていた風が、けさ夜あけ方にわかにいっせいにこう動き出して、どんどんどんタスカロラ海溝かいこうの北のはじめがけて行くことを考えますと、もう一郎は顔がほてり、息もはあはあとなつて、自分までがいつしよに空を翔かけて行くような気持ちになつて、大急ぎでうちの中へはいると胸を一ぱいはつて、息をふつと吹きました。

「ああひで風だ。きようは煙草たばこも栗くりもすつかりやらえる。」と一郎のおじいさんがぐり

のところ立って、ぐつと空を見えています。一郎は急いで井戸からバケツに水を一ぱい飲んで台所をぐんぐんふきました。

それから金かなだらいを出して顔をぶるぶる洗うと、戸棚とだなから冷たいごはんと味噌みそをだして、まるで夢中でぎくぎく食べました。

「一郎、いまお汁しるできるから少し待つてだらよ。何なしてけさそつたに早く学校へ行がないやないがべ。」おかあさんは馬にやる（不詳）を煮るかまどに木を入れながらききました。

「うん。又三郎は飛んでつたがもしれないもや。」

「又三郎つて何だてや。鳥こだてが。」

「うん。又三郎つていうやづよ。」一郎は急いでごはんをしまうと、椀わんをこちこち洗つて、それから台所の釘くぎにかけてある油合羽あぶらがつばを着て、下駄げたはもってはだして嘉助をさそいに行きました。

嘉助はまだ起きたばかりで、

「いまごはんをたべて行くがら。」と言いましたので、一郎はしばらくうまやの前で待つていました。

まもなく嘉助は小さい簀みのを着て出て来ました。

はげしい風と雨にぐしよぬれになりながら二人はやつと学校へ来ました。昇降口からはいつて行きますと教室はまだしいんとしていましたが、ところどころの窓のすきまから雨がはいつて板はまるでぎぶぎぶしていました。一郎はしばらく教室を見まわしてから、

「嘉助、二人して水掃ぐべな。」と言つてしゆる箒ぼうきをもつて来て水を窓の下あなの穴へはき寄せていました。

するともうだれか来たのかというように奥から先生が出てきましたが、ふしぎなことは先生があたりまえの単衣ひとえをきて赤いうちわをもっているのです。

「たいへん早いですね。あなたがたふたりで教室の掃除そうじをしているのですか。」先生がききました。

「先生お早うございます。」一郎が言いました。

「先生お早うございます。」と嘉助も言いましたが、すぐ、

「先生、又三郎きよう来るのですか。」とききました。

先生はちよつと考えて、

「又三郎つて高田さんですか。ええ、高田さんはきのうおとうさんといっしょにもうほかへ行きました。日曜なのでみなさんにご挨拶あいさつするひまがなかったのです。」

「先生飛んで行つたのですか。」嘉助がききました。

「いいえ、おとうさんが会社から電報で呼ばれたのです。おとうさんはもいちどちよつとこつちへ戻られるそうですが、高田さんはやっぱり向こうの学校にはいるのだそうです。向こうにはおかあさんもおられるのですから。」

「何^なして会社で呼ばつたべす。」と一郎がききました。

「このモリブデンの鉋脈は当分手をつけないことになつたためなそうです。」

「そうだないな。やっぱりあいづは風の又三郎だったな。」嘉助が高く叫びました。

宿直室のほうで何かごとごと鳴る音がしました。先生は赤いうちわをもつて急いでそつちへ行きました。

二人はしばらくだまつたまま、相手がほんとうにどう思っているか探るように顔を見合
わせたまま立ちました。

風はまだやまず、窓ガラスは雨つぶのために曇りながら、またがたがた鳴りました。

青空文庫情報

底本：岩波文庫『童話集 風の又三郎』

1951（昭和26）年4月25日 第1刷発行

1967（昭和42）年7月16日 第24刷改版発行

入力：柴田卓治

校正：野口英司

1998年11月5日公開

2012年7月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風の又三郎

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>